九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「病気」の表現活動にみる生存者の肯定の技法

杉本, 洋
北陸先端科学技術大学院大学

伊藤, 泰信
北陸先端科学技術大学院大学

https://doi.org/10.15017/2344472

出版情報：九州人類学会報. 37, pp.51-68, 2010-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

論文

「病気」の表現活動にみる生存者の肯定の技法

杉本洋・伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学）

キーワード：「病気」、表現活動、生存者（サバイバー）、肯定の技法

I　はじめに

人類学およびその隣接領域では、「病気」を生きる人々の実践や経験について、医療の近代化による二項対立的な病気と健康の間を生きる境界領域の複雑性や実践の機微が明らかにされている［近藤 2004；浮ヶ谷 2007；浮ヶ谷 2004；田垣 2006］。

それらと通底する問題意識を有しつつ、病気や障害を生き抜いてきた人々を、患者や被害者ではなく生存者（サバイバー）[1]という観点から考察する試みが始まっている。

「病気」を持つ人々の考え方や暮らしを見据える上では、人々自身の経験や暮らす環境について、病気や障害が持つ欠落や苦痛にとどまらない包括的な理解が求められる。そこで、生存者という観点からとらえる動きが出てきていると言える［Herman 1992=1996；Evans and Sullivan 1995=2007；Lifton 1968=2009］。特に、被虐待経験、精神疾患、がん、災害、戦争などの状況を生き抜いてきた人々を生存者（サバイバー）と位置づけ、いわゆる被害者や患者という位置づけを超えた生存者の回復の過程やそこに至る経験を明らかにする取り組みがなされている［Lifton 1968=2009；近藤・峰岸 2006］。

ここで付言しておくが、本稿で、カギカッコ付きの「病気」は、「患うこと（suffering）」の経験を含んだ「病気（illness）」のみならず、障害をはじめとする様々な生きづらさ（場合によっては病気や障害とは一般に見なされないものをも含む）を抱える人々の経験を緩やかに指し示すものとしたい。

それでは、生存者たちはいかにサバイブしているのだろうか。生きづらさを生きるための方途の１つとして、肯定が挙げられる。

生存者の回復過程は、個別的で複雑であるものの、一定のパターンを見いだすとするならば、安全の確立、想起と服喪追悼、通常生活との再結合の３段階の過程を経ることが示されており、「病気」を抱えた人々の回復の過程においては、自己を肯定することが基本的な要素とされる［Herman 1992=1996］。

本稿は、病気や障害、生きづらさをパフォーマンスとして表現するイベント「こわれ者の祭典」についての参与観察的調査から、病気を持つ経験を有する表現者が実践する肯定の技法を明らかにすることを目的としている。「こわれ者の祭典」で活動する表現者は、「病気」の体験を積極的に表現する人々であり、多様で重層的な「病気」の経験を有しながらも、患者・被害者という観点のみではとらえきれない生存者である。

例えば、自助グループで同じ境遇の人々に出会うことは、自己肯定、回復につながるとされ［Levy 1976；Katz 1993=1997］、ひとつの肯定の技法となりうる。

「こわれ者の祭典」がそうであるように、表現活動という側面に関して言えば、例えばアウトサイダーアート／ディスアビリティーアートといわれる分野に見られるように、芸術的手段を用いて自らを表現することでアイデンティティを発展させていることなども肯定のひとつの技法といえる［Barns et. al. 1996=2007；服部 2003］。

しかし、当事者自身が肯定を志そうとも、当事者自身が弱者であることから脱却することを望まないこともありうること［横塚 2007］、病気や障害を肯定しようとしても健常者社会の圧倒的な影響力に脅かされ、肯定が困難であることも指摘されている［田垣 2006］。肯定が容易にはなされにくい中、「こわれ者の祭典」では、そのコンセプトや表現活動において、肯定（その技法は、本論で示すようにいくつかの方向性をとるが）の立場が貫かれている。本稿はそれらの詳述を交えつつ、生存者が有している肯定の技法を明らかにする。

Ⅱ　「病気」の表現活動

1.「こわれ者の祭典」概要

本稿の対象は新潟を主たる活動の場とする「こわれ者の祭典」である。イベント時の配布資料などによると以下のように説明がされている。「『病気』の体験発表＆パフォーマンスイベント。『病気でどう苦しみ、そこからどう回復したか』をユーモアを交えたトークと、その病気に関するパフォーマンスで盛り上げる。現在まで、アルコール依存症、ノイローゼ、うつ、幻聴幻覚、過食症、引きこもり、脳性まひ、リストカット、自殺未遂、パニック障害、性同一性障害、などの体験者が出演した」（イベント案内資料 2010年4月18日）。

「こわれ者の祭典」はイベントであるが、イベント名であると同時に団体名としても使われている。2002年5月に第1回のイベント「こわれ者の祭典」が行われ、以後現在（2010年）まで継続している。イベント「こわれ者の祭典」は1年に計4回（新潟2回、東京2回）それぞれ春と年末の時期になされているが、2009年においても、2月28日には福島公演、9月20日には秋田公演を行うなど、新潟、東京以外の公演もなされている。

筆者の1人（杉本）は、メンバーらより　調査許可を得たうえで、当該イベントメンバーが行うその他の活動、運営にかかわる話し合いなどに、主にスタッフ（新潟・東京間のイベント会場へのメンバーの送迎、物品等の管理業務、配布資料の準備などの補助・手伝い等）として、ときには観客として、2008年末より約1年6ヶ月にわたり関わらせて頂いている。もう1人の筆者（伊藤）はイベントの観客として活動を垣間見、またイベント後に観客を交えて行われる交流会で、集まった人々の思いを聞かせて頂くなどの機会を得た。

写真：東京公演（新宿ロフトプラスワンにて）

2. 活動のコンセプト

次に「こわれ者の祭典」のコンセプトを示す。配布される資料には以下のような記載がある。

> 生きることがヘタな人間集結！／生きることに障がいや「生きづらさ」を持つ者たちが、／「生きづらさ」のある部分を「ありのまま」に受け入れて／そのことを自慢しあい露出しあうことにより／「生きやすさ」へとつなげていく／生きるヒントの分かち合いの祭典（イベント案内資料 2010 年 4 月 18 日）

本活動に見られる姿勢は、生きづらさを自慢し合い、積極的に肯定する立場である。

イベント時に配布された配布資料に記された「こわれ者の祭典」代表の月乃光司さん[2)]の文章を示す。

> 以前、病気の自分が嫌だった。／精神科に通院したり、入院したりする自分が、ものすごく嫌だった。／世の中で一番、嫌なのは自分で、だから自殺未遂をした。／27 歳の時が最後の入院で、それから 10 年が過ぎた。／今は、病気の自分もそんなに悪いもんじゃないな、と思っている。／病気から癒されることは、病気そのものが無くなってしまうことではなく、病気を自分の個性として受け入れ、そのままの自分で生きていこうと決意することだ、と気付いたからだ。／「こわれ者の祭典」に、病気自慢のつわもの達が集結する。／きっと、血沸き肉踊るような、自己肯定の分かち合いの場になるだろう。／今、生きることに苦しんでいる人に、ぜひ来てもらいたい（イベント案内資料 2010 年 4 月 18 日）

これは長期にわたって配布資料に掲載され続けられており、こわれ者の祭典のコンセプトとしてメンバー間で共有されている内容である。嫌いだった自分が肯定されていく流れが記されており、その立場は「病気」があれども、「病気を個性として受け入れ、そのままの自分で生きていこうと決意すること」である。パフォーマンスを行うことにより「血沸き肉踊る」活動となっており、「自己肯定の分かち合いの場」でもある。

3. メンバー

メンバーの構成は、日々会社員として暮らしながら「こわれ者の祭典」の代表を務めている月乃さん、イラストレーターとして活躍しながら副代表を務める Kacco（カッコ）さんをはじめ、常時活動している表現者が 5~6 名程度（年齢は 20 代から 40 代くらいまで）、スタッフは筆者を含めて 3 名程度となっている（イベント当日はさらに 5~6 名程度のスタッフが加わる）。また、2006 年にはイベントに参加するためのオーディションを行っており、その合格者 7 組をオーディションメンバーと称する場合がある（オーディション参加者は全員オーディションに合格している）。オーディションメンバーの多くは、「こわれ者の祭典」に出演することもあれば、出演はしなくとも、月乃さん、Kacco さんなどのメンバーと様々なイベントを共に行っている。作家の雨宮処凛氏が名誉会長となっており、2009 年 12 月 20 日の東京公演において、性同一性障害の政治家の上川あや氏と共にゲスト出演をしている[3)]。

「こわれ者の祭典」のメンバーは後述するようにさまざまなライブやイベント、講演活動などをこなしつつ、それぞれの職業生活・日常生活を営んでいる。メン

バーによっては、そうした日常生活に、通院・服薬など、医療・治療的な活動が組み込まれている。メンバーはそれぞれ作品の制作を行い、パフォーマンスやトークに用いる時間やテーマなどのイベントの進行やトーク内容についてイベント前に大まかな打ち合わせ（メールなどインターネットを介した情報共有等含む）が行われ、イベントにのぞむ。

4. 観客

観客は、たとえば2009年12月の「こわれ者の祭典」新潟公演においては、70〜80名ほどの集客があった。同時期の東京公演では90名程（2010年5月の多いときには120名近く）の集客があった。終了後に行われる打ち上げ交流会の参加者、アンケートなどの内容から推察すると、病気や生きづらさを抱えている当事者、その家族、保健医療福祉関係者などが観客を構成している[4]。表現者団体「こわれ者の祭典」は、後述するがイベントとしての「こわれ者の祭典」以外にも様々な活動を行っており、イベントの内容によって客層も異なってくる。

5. イベントの進行

1）開演以前

本稿では新潟公演の一例を挙げる。会場は新潟市内の福祉会館のホールである。イベントにかかわる人々は、出演するメンバー、司会者、スタッフ、ゲスト、パフォーマンスで表現者とともにパフォーマンスを行うギタリスト、観客、取材に来ている新聞社やテレビ局などマスコミ関係者などで構成される。午前9時頃よりメンバー、ボランティアスタッフなどが集まりはじめ、観客用の椅子を並べるなどの会場の設営がなされる。11 時頃、スタッフとメンバー、司会者との打ち合わせ、メンバーによるリハーサルがなされ、音響バランスや進行などが確認される。会場の入り口近くに活動に関連する著書やCDなどの物販ブース、受付が設定される。午後1時頃開場し、観客が入場する。公演は有料であるが入場料は障害者手帳による当事者の割引制度がある。午後1時30分前頃、前ふりとしてのメンバーのトークなどがなされ、午後1時30分頃に開演を迎える。

2）生きづらさ自慢の自己紹介

メンバーが入場し、メンバーの紹介や活動の概略が説明される。以下は、イベント開始時、メンバーの周佐さんが月乃さんを紹介する場面である。（以下、日付と公演名が付されているものは、公演を録音し、テキストにおこしたものである。）

周佐　月乃光司さん、こわれ者の祭典代表。1965年生まれ。見てのとおりの変態です。

月乃　よろしくお願いします。（2009年12月13日新潟公演）

その後、メンバーたちの簡単な自己紹介が続く。

先のコンセプト（イベント案内資料）にも書かれていたように「自慢しあい露出しあう（さらけ出す）」のが本活動の特徴である。一般的に、病気や障害は否定され、隠されがちであるのに対し、自慢しあうことは非常にユニークと言えよう。自慢は、最初に表現者がステージ上で自己紹介をするときにもなされる。以下にステージ上で行われる自己紹介（アイコさん、Kaccoさん、月乃さん）の一例を記す。

アイコ　強迫行為[5]自慢のアイコです。

Kacco　摂食障害[6]・引きこもり自慢の

カッコです。

月乃　アルコール依存症・引きこもり自慢、現在「頭髪障害」が進行している月乃光司です。（2009年12月13日新潟公演）

以上のようにそれぞれの傷病名や生きづらさを「〇〇自慢」として表現する。ちなみに頭髪障害とは、頭髪が少なくなってくること（頭髪が不自由であること）を表現したものであり、アルコール依存症などの疾患名と並んで生きづらさとして自慢されている。頭髪障害という言葉は、ユーモアも加味されているが、医学的疾患と他の生きづらさの受容の困難さや生きづらさの程度において明確に区分されるものではなく連続的なものであることを示している。

3）パフォーマンス・トーク

次に、個々のメンバーのパフォーマンス（朗読、歌など）と病気の体験や現在に至る経緯、回復への契機などのトークが、そのイベントの際のテーマに沿ってなされる。ちなみに直近の2009年12月の公演のテーマは「ユーモアで『生きづらさ』を吹き飛ばせ！」となっている。以下は、イベントのテーマを紹介しているところである。

月乃　今日のこわれ者の祭典ですけれども、「ユーモアで生きづらさを吹き飛ばせ」としまして、年末にあたって、生きづらさが、ますます、私もこじらせていますけど。

司会　そうですね。いろいろこじらせていますね。

月乃　もうちょっと笑って、この気持ちをちょっと上げようということで。（中略）そんなことで、笑いで生きづらさを吹き飛ばそうというのが今日の趣旨です。今日はよろしくお願いします。（2009年12月13日新潟公演）

その後パフォーマンスやトークを行いイベントは終了する。時間としては休憩を挟み3時間程度、パフォーマンスはメンバー5人程度、加えてゲストとのトークで構成される。最後にメンバーとゲストから一言ずつメッセージを伝え、終了する。

アイコ　朗読でも言ったんですけど、人は絶対一人では生きていけないし、自分の中に流れている血も母親の母親の母親のと、ずっと続いて独りぼっちにはなれない。生きている限り独りぼっちにはなれないと思うので、独りになる覚悟だけはしないでください。今日はありがとうございました。

月乃　今日は長いあいだ、ありがとうございました。私も明日から会社員で、もうボロボロです。はげるは、腹は出るわ、単なるダメ中年としてまた明日からも生きますけど、今日一日だけみんなで生きていきましょう。また翌日になったら、今日だけ生きようと言って、生き延びていれば、だんだん問題も解決していくことも多いと思うので、また生きてここで皆さんとお会いしたいと思います。（2009年12月20日東京公演）

4）終了後

終了後は、近隣のなじみの店で打ち上げ交流会がもたれ、出演者とスタッフ、お

よび有志の観客たちが参加する。すべてのメンバー、スタッフが打ち上げ交流会に参加するわけではないが、新潟公演ではたいてい20名弱程度の参加者がある。観客も含めた打ち上げ参加者の自己紹介がなされ、パフォーマンスが披露されることもある。午後6時頃から始まる交流会は9時頃に終了する。打ち上げ交流会においては、ほぼ毎回参加する人（観客）もいれば、数年ぶりに参加する人（観客）など様々である。保健医療福祉関係者や、活動を支援する人などの参加もある。参加者自身も病気や生きづらさを抱えている人が多く見受けられ、そこでは、日常的には話しにくいであろうプライベートな病気の経験なども明るい雰囲気のなか、ざっくばらんに語られる[7]。

Ⅲ　表現の手法と内容

1. 表現手法

主な表現手法は、自作詩、自作曲によるパフォーマンス、病気のトークなどである。また、本稿における記述においては限界があるが、表現者それぞれの表現方法や、作品は「こわれ者の祭典」のコンセプトとしての統一感は保ちつつも多様である。たとえば、Kacco さんは、男性ながら、女性用の衣装やメイクを活用し、長髪で「ユニセックス的」「中性的」［高橋ほか 2003：145］な姿でパフォーマンスを行っている。アイコさんは、朗読や歌など幅広い表現を行っている。また、脳性マヒ[8]を有しながら「脳性マヒブラザーズ」というお笑い芸人ユニットとして活動している DAIGO さんと周佐さんは、芸人としてのコントなどパフォーマンスを行うとともに、障害を有する生活に関係するトークなどを行っている。

2. 表現作品例

表現者達はイベント時に自作の詩の朗読や歌といったパフォーマンスやトークを行う。ここでは、自作の詩の一部を例示する。代表の月乃さんによる「人生なんでもあり」という詩の一部である。複数回にわたって朗読されている詩であり、イベントで朗読される際は、主にギタリストの演奏と共に、絶叫系の朗読がなされる[9]。

アルコール依存症になってよかった／お酒をたくさん飲んで肝臓を壊して／医療費をたくさん払い／我が国の経済に貢献した（中略）
引きこもりになってよかった／オナニーをたくさんして、ティッシュをたくさん消費して／我が国の経済に貢献することができた／引きこもりになってよかった／外に出ることができるようになった時に／本当の自由を知ることができた（中略）
人生はすばらしい／ライフイズビューティホー！／たとえ会社でいじめられてもだ／僕をいじめるのは／渡辺マサシ58歳、経理課課長／マサシ死なないかなー、と毎日思ってきた／そのマサシも残り1年2ヶ月で定年退職だー／マサシのおかげで、引きこもり出身の甘ちゃんの俺も打たれ強くなった／マサシさん、どうもありがとう！（中略）
アルコール依存症になってよかった！／引きこもりになってよかった！（中略）
いじめられてよかった／ぶざまでみっともなくてよかった（中略）
男らしくなくてよかった（中略）
神様、僕に生きづらさを与えてくださり感謝します！　［月乃 2006：52–59］

「病気」や「生きづらさ」に対する強い肯定への志向がうかがえる。詩の内容は必ずしも病気のみではなく、会社勤めの中で上司（マサシさん）との関係がストレスであり、マサシさんのおかげで打たれ強くなって感謝しているというエピソードが含まれる。「オナニーをたくさんして」などと性的な話も含まれる。

次に Kacco さんの朗読の例を挙げる。月乃さんの絶叫系の朗読とは対照的にソフトで繊細な朗読がなされる。

Kacco 流癒しのエッセー「笑顔を大切に」／さあてっと／今日もバッチリメイクを決めて／急いで会社に行く準備をしないとね（中略）
あーあ　疲れた／今日もこんなに歩き回っているのに／全然成績につながらない／結局、何とか話を聞いてもらったところが１件（中略）
朝なんてこのまま来なければいいのに。／楽になりたい／食べ物、アルコール、ドラッグ／楽になれるなら何でもよかった／ベッドから起き上がるとありったけの食べ物を／手当たり次第口に運ぶ
おいしい？／味なんてわからない／お腹いっぱいになった？／どれだけ食べても満たされることなんかないんだ（中略）
そんなの本当の自分じゃない／本当の自分って／背伸びしない／小さくならない／等身大の自分で生きていたいんだ／知らず知らず出せなくなっていた笑顔を取り戻したい／今日から笑顔の練習をしてみよう（2009 年 12 月 13 日新潟公演）

摂食障害に関係するようなエピソードや仕事で疲れている女性のストーリーが表現されている。

3. トーク内容

パフォーマンスとともに、病気をはじめとする生きづらさに関係するトークがイベントの中心である。生きづらさと回復のきっかけが主たるトークの話題となる。

司会　じゃあ、月乃さん。月乃さんが一番生きづらかったときは。
月乃　やっぱり 10 代、20 代に、常に独りぼっちで、うちにいても独り、手首切ったりしたんですけど。血が流れても独り。
周佐　今、サラッといきました。
月乃　サラッといきましたけど。切ったりとか。それで、すごい絶対的な孤独みたいなのがあって、今日こういうところ、私、ギリギリに何かコンサートを見に行ったりしたけど、大勢の中で独りぼっちというのがすごくつらくて、それがつらかった気持ちですね。（2009 年 12 月 13 日新潟公演より）

孤独感が強かったことが辛さとしてあげられている。月乃さんの回復のきっかけについては、たとえば以下のようにアルコール依存症の自助グループとの出会いのエピソードが語られる。

月乃　そうですね、私にとって仲間との出会いが、今、会社員なんですけど、生きられるようになったんです。世の中には当事者同士の自助グループって会があります。統合失調症なら統合失調症、引きこもりなら、引きこもり。私の場合はアルコール依存症の自助グループがあるんですけど、病院にいって教えてもら

ってそこに行ったらもうアル中の人が勢揃いしていて、でもお酒を飲まないでがんばろうって会があるんですよ。今日のイベントもそれに近いんだけど、っていうかそのものなんだけど、みんなが負い目とか恥ずかしい話とかね、変態の話とかね、赤裸々に話して。（2009年2月28日福島公演）

次にアイコさんにより語られた内容の一部を示す。

私は強迫神経症なんですけれども、わかりやすい例を言うと、手を洗うことがとめられないとか。自分の考えていることが吹き出しみたいに出て、大勢の人の中にいるとみんながそれを見て、私の心の中を覗いているんだと思ったりして、無心になろう、無心になろうと言うほどに、いろいろ考えてしまったりとか。あと、家の中の暴力がすごくたくさんあって、「おまえはだめだ、だめだ」と言われていたら、本当にだめなんだなって自分でもすごく思って、学校に行けなくなったりしたときがとてもつらかったです。（2009年12月13日新潟公演）

回復のきっかけとして、家庭内で暴力をふるっていた祖父のエピソードが語られる。

アイコ　前もイベントで話したんですけど、家庭内暴力を受けていた祖父が、私にとってただ憎いという固まりのものだと思っていたのが、間違えてイヌ用のクッキーを食べているのを見たんですよ。そのときに、味がないのに気づかないんだなと思って。

司会　おいしそうに食べている。

アイコ　食べていたんですよ。言わなかったんですけど、そのままにして、この人も間違えることがあるんだというのがわかった瞬間に、あれ、この人、人間だったんだというのが急にわかってきて、そしたらちょっとだけ生きづらさが取れたんですよ。この人も過去に何かあったのかもしれないと思うようになって、そしたら自分の恥ずかしいことをどんどん話している月乃さんに出会ったり、そういう仲間に出会っていたら、自分から言いたくないことをぶちまけてしまえば、もうそれ以上マイナスになることはないから、人と付き合いやすくなりました。（2009年12月20日東京公演）

次に、Kaccoさんによる体験のトークの例を挙げる。

Kacco　まず一つは、そのときにサラリーマンやっていたんですね。もちろん、この格好じゃないんだけど。その職種が不動産業だったんですよ。23歳ぐらいかな、からそこに勤めて、動かすお金が大きいじゃない。契約書つくって、一筆間違ったとか、書き忘れたとなると相当なあれでしょう。

その、たぶんストレスやプレッシャーが日々あったことが一つとか。あと、やっぱり家族の前でも、誰の前でも本当の自分を出せなかった。（中略）やっぱり求められるものに、自分がそ

うなんだって、なりきる、演じるしかなかった。

司会　立派なサラリーマンとか。

Kacco　そう、そう、立派なサラリーマンとか。（中略）そう、そう。それは全部、そこのシーンで演じなきゃいけなくて。

司会　つまり異常をやっていたわけですね。

Kacco　そう。だって、例えば Kacco って明るいよねって言われているところで、暗くなっていたら「違うんじゃない」「今日どうしたの」って言われるじゃない。それがやっぱり嫌で。（2009 年 12 月 13 日新潟公演）

期待される役割に応えることのつらさについて語られている。回復のきっかけについては、イラストとの出会いが語られる。

まぁ、そういうのが全部コンプレックスで、乗り越えられないで、コンプレックスだったんですが、病気をしました。躁鬱病や摂食障害や、パニック障害、で、そんな中で出会ったのが、イラストを描くという表現の世界に出会って、そこでは自分らしさを出していいってことを教えてもらったんです。自分らしさ、個性を大事にしていい世界だ、そしたらコンプレックスだとずっと思っていたのが、それは生きづらさのままで一生生きていかなきゃならないんだけど、コンプレックスも個性にかえられないかなって思ったときに、これがあったわけですね。（2009 年 2 月 28 日福島公演）

出版物の中でも Kacco さんは以下のように語っている。

僕はさっき言ったように、なんとからしくとか、例えば男らしく女らしくっていうのを嫌ってたし、こうあるべきだっていうようなあんまり型にはめようとするのは嫌いだったから。だからそれを崩そうとしたときに、男でもなく女でもない部分でこういう生き方もあるんではないかっていうメッセージ的なもので今のファッションはあって［高橋ほか　2003：146］。

Kacco さんによると、中性的なファッションは、男らしさ、女らしさ、という枠組みにとらわれないあり方を示している表現でもあるとのことである。

最後に、月乃さんのパフォーマンス前のトークと、今後の活動についてのトークである。

月乃　今日は本当に長いあいだありがとうございます。いろいろ生きづらかった僕たちですけど、いろいろ私、相談受けて、「こんな私でも大丈夫ですか」と言われるんですけど、自信を持って大丈夫ですと言っています。なぜかというと、私を含めて一緒にやっている仲間が、お話を聞いてわかるように、かなりかつて最低だったんですけど、その人たちが今何となく幸せに生きているんで、どんな人でも生き延びていけば大丈夫だと、本当に私は確信を持っています。（2009 年 12 月 20 日東京公演）

月乃　親子間の親が不仲だったりすると心の傷があって、そこから依存症に発症する若い人が最近多いらしいんですけど。その辺が、

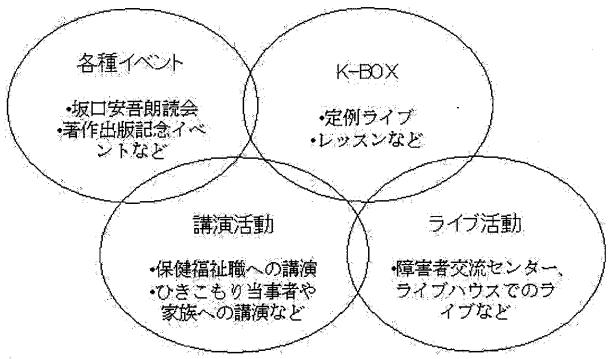

図1 メンバーの活動

メンバーは「こわれ者の祭典」以外に各種イベント、個々の表現者としての講演やライブなどの活動を行っている。これらの活動は「こわれ者の祭典」のメンバーとして行われている場合やそうでない場合などさまざまであり、団体やメンバーとしての活動とそうでない活動との境界は曖昧であり、部分的に重なっている（図１）。

広く、アル中というと変な人、意志が弱い人じゃなくて、いろんなプロセスがあって病気になった人と考えて、まわりがクールに病気の対応をすれば、たくさんの人の命が助かるので、そういうことを当事者として伝えていく活動を来年からはやっていきたいと思います。

司会　来年。ああ、拍手していますね。

月乃　ありがとうございます。

司会　今までもやっていたようなもんじゃないですか。

月乃　でも、やっぱり閉ざされた世界だったので、もっと広く世の中にね。（2009 年 12 月 13 日新潟公演）

「今何となく幸せに生きている」姿を見せることで、「どんな人でも生き延びていけば大丈夫」というポジティヴなメッセージが発せられている。また、依存症を有する人が、意志が弱い人というわけではないこと、周囲の人々によって助けられ、回復もまたなされていくことを広く伝えていきたいと語られている。

Ⅳ　メンバーの活動

1. 各種イベント

たとえば、「坂口安吾作品朗読会『安吾絶唱』」（2009 年 8 月 13 日）や、「月乃光司著『心晴れたり曇ったり』出版記念ライブ」（2009 年 9 月 7 日）といった月乃さんの著作の出版イベントが「こわれ者の祭典」のホームページ上でも案内され、実施されている。

2. K-BOX

K-BOX は Kacco さんが代表となり、行っている活動である。心の病いや引きこもり経験のある人たちがアーティストとして所属しているプロダクションである。MUSIC 部門、PERFORMANCE 部門、ART 部門と 3 部門で構成されており、音楽や詩の制作や朗読などのパフォーマンス、美術活動などを行っている。現在 20 名弱程度のメンバーが在籍しており、週に 1 回のレッスンという練習をする活動と、定期的なライブ活動（2010 年は隔月）を主とする活動として行っている。ライブ活動ではパフォーマンスとともに病気などについてのトークを行ったりと、「こわれ者の祭典」と類似するところも多い。

3. 講演活動等

「こわれ者の祭典」のメンバーは講演活動なども行っている。たとえば、Kaccoさんは、「NPO法人POTA（精神科作業療法協会）第45回全国研修会 in 新潟」（2009年9月13日）において、参加者の作業療法士を対象とした当事者発表をしている。また、2009年5月9日には「ひきこもり経験からのメッセージ」として、上越市で当事者や当事者の家族の方々を主とした対象としてトークライブを行っている。その他代表の月乃さんも多数の講演活動を行っている。

4. ライブ活動等

脳性マヒブラザーズのDAIGOさん、周佐さんはお笑い芸人としての様々な活動を行っている。また、オーディションメンバーであり、「こわれ者の祭典」においてギタリストとして活躍し、自作曲のパフォーマーでもあるYoppy（ヨッピ）さんは統合失調症の経験を有する表現者である。こわれ者の祭典以外にも、新潟市内の障害者交流センターでのライブ（2010年1月25日）、また、Yoppyさんがヴォーカル、ギターを務めるバンドのライブ（2010年2月11日）など、「病気」と関係するイベントから、全く「病気」とは関係のない純粋に音楽的なライブ活動に至るまで幅広い活動を行っている。

V　表現活動にみる肯定の技法

以下、見いだされた肯定の技法を、分かち合う／表現する／創作する／笑いにする／自慢する／他者を肯定する／プライドを削りとる、という7つに暫定的に分類しつつ見ていきたい。

1. 分かち合う

まずは、同じ経験を有する人たちが集い、生きづらさや痛みを分かち合うこと、分かち合える「仲間」となることである。月乃さんによる詩、およびメッセージである。

> 僕と同じ痛みを持つ人たち、それは僕の仲間だ。／僕と同じ「生きづらさ」を持つ人たち、それは僕の仲間だ。／手首に傷のある女の子、僕の仲間だ。／ひとりぼっちの部屋、見つめるのはインターネットだけの少年、それは僕の仲間だ。／精神科病棟、外来の待ち時間に孤独を見つめる人たち、僕の仲間だ。／日本全国二百万人の「アルコール依存症」の皆さま、僕の仲間だ。／日本全国百万人の引きこもりの皆さま、僕の仲間だ。／仲間、仲間、仲間、仲間。／仲間がいれば、僕はきっと生きていける。／仲間で、傷を舐めあって、傷口をほじくり回して、傷口をつつきあって／流血して、大流血。／血と汗と涙を流しながら、生きていこう、仲間。（2010年5月30日東京公演で朗読されたもの。月乃［2006］所収の詩とは細部が異なる）

実は私の場合だけど、私にとって仲間、それは同じようなある種病気であったりとかひきこもりであるとか、仲間同士の人間関係っていうのが実は一番訓練になるし、分かり合えるし、一番癒し効果があるんじゃないかと思います。それで私にとっての依存症者の自助グループなんですけど、たとえばひきこもりの人だったら、ひきこもりの人が集まる居場所的な所ってのがあり、そういう所で「自分もひきこもってた、君もひきこもってたんだね」と言うときに話が合うし、理解し合うことができる。そういう場所に行くとね、すごく人間関係の楽しさとかそういうのがあるんじゃないかなって私は思ってる

んですよ［高橋ほか　2003：71］。

「公開自助グループ」と形容されることもあり、コンセプトにおいても「自己肯定の分かち合いの場」と表現されている「こわれ者の祭典」では、孤立感を緩和し、語りを聞き合うことで互いに共感し、承認される場となっている。相互に生き抜くための技術を共有しながら肯定を成し遂げていく。弱さや不完全さが人をひきつけ相互にケアがなされる姿である［浮ヶ谷　2009；浦河べてるの家 2005；金子　1992］。

2. 表現する

本活動の最大の特徴の１つは表現活動であるという点にある。この点において、経験を吐露し、共有する場であるという共通点がありつつも、一般的な自助グループとは異なる特徴を有することになる。つまり芸術的なパフォーマンスをすることで、表現者の経験が他者や社会に対して開かれることである。本表現活動においては、１つには質の高いパフォーマンスを行い、それが認められることによって、自らが肯定されるという側面があることが想定される。そして、もう１つはパフォーマンスを行うことによって社会的インパクトを促すことが活動への意義を深め、更なる肯定を促進することが考えられる。パフォーマンスは自らの正当性を主張し、境界を侵犯するといわれている［Roach 1995；Conquergood 1995］。パフォーマンスという形態をとることにより社会に当事者の経験を主張できる。そして多くの人々の「病気」に対する理解を深め、社会の変容を促すという社会モデルを当事者が自ら実践していくかたちが見出されよう。

3. 創作する

表現活動を行う上では創作が行われる。たとえば、詩や歌、曲、コントなどである。Kacco さんは、イラストの依頼が来た時に必要とされることを実感し、うれしかったという。そして、描くことに集中することでくよくよ悩まなくなった、という［高橋ほか　2003］。創作活動をすることは、不安に襲われることが少なくし、自身を必要とされることを実感するための技法といえる。障害や病気を持つ人々、生存者の芸術には、ハンセン病や原爆文学などにみられるように質の高い芸術作品が知られている［Lifton 1968=2009；山本・加藤　2008］。アウトサイダーアート／ディスアビリティーアートという文脈においては、アウトサイダーのもつ部外者という意味合いは芸術的な文脈においては、肯定的にとらえられるという［服部 2003］。障害者の芸術活動を語る際には、病気や障害により失われた能力をとりもどす療法としての意味が強調されること、また、障害があれども果敢に取り組むという勇敢な障害者像として障害者が語られることに対して、抵抗も存在する［Barns 1994=2004］。生存者の芸術という観点は、療法としてのみではなく、創造性や、意味の生成や社会に対するインパクトに着眼していく必要があろう。「こわれ者の祭典」のメンバーの創作活動は、純粋な芸術的観点から評価されうる、と同時に、決して誰かから処方されたり、自ら意図していたわけではないと思われるが、結果としていわば療法としての創作活動という意味合いも包含しているように思われる。

また、生きる強さとしての首尾一貫感覚を提唱した社会学者アントノフスキーは、生きづらさを生じさせるストレス源に対して、自らの能力のみならず、周囲の資源を信頼し、動員して、ストレス対処にあたる力・姿を描き出している

［Antnovsky 1987=2001］。本活動において、表現活動という形態をとって様々な創作がなされている。その際、生きづらさを「対処すべき問題」と位置づけるのみでなく、むしろ生きづらさ自体を、あたかも（題材として）資源のように動員しつつ創作するありようが看取されるように思われる。

4. 笑いにする

本活動には笑いが通底している。メンバーの脳性マヒブラザーズはお笑い芸人であり、各種パフォーマンス、メンバーのトークにおいては笑いが引き起こされる。当事者の笑える物語は、周りを楽しませ、和ませ、当事者の語りに耳を傾ける人が増えることが示されている［稲沢 2006］。ユーモアある語りやパフォーマンスを行うことで、表現者自身にとって、肯定がなされる。笑いにすることはひとつの肯定の技法となりうる。しかし、一方で笑いの文脈で語ることで聞き手にウケの良い語りが量産され、過酷な現実が覆い隠される可能性が指摘もある［稲沢 2006］。本表現活動において当事者の占める割合の多い聞き手においてそうした過酷な現実が覆い隠されているように感じ、不快に感じる人もいる可能性もある。しかし、それでも笑いが加味されることにより、あるいは生きづらさをポジティヴに笑いに変換することにより、自己の肯定を容易にしていける側面が強いことは否めないのである。

5. 自慢する

既述したように、イベントの自己紹介において表現者は積極的に自慢する。パフォーマンスやトークにおいて、「病気」があることを誇りに思っているように表現されているところが多々ある。そこには弱者や患者、被害者という色合いは薄い。生き延びてきた生存者としての自己規定を強化するように思われる。「病気」であることを逆手にとって活かすとりくみは、「弱さを絆に」などのキャッチフレーズや、幻聴や妄想を語り合う「幻覚＆妄想大会」などのユニークな試みが注目を集めている「べてるの家」の活動と共通する点がある［浦河べてる　2005］。「病気」を肯定するということは困難なことであるが、適切な場を持ち、自慢という形をとることは１つの技法となりうる。

6. 他者を肯定する

前述の月乃さんの「人生なんでもあり」という詩では会社でマサシさんという上司にいじめられるエピソードが含まれていた。そこではマサシさんに感謝している気持ちを表明している。アイコさんは、犬用のクッキーを食べる祖父を見て、祖父に対しての憎しみの感情が薄れた経験を語っている。（これを技法と言えるかどうかは、更に精査が必要であるにせよ）憎しみの対象ですらある他者をも、肯定していくことが、自己の肯定と繋がっていることが推察される。

7. プライドを削りとる

本活動に特徴的な点であり、技法の機微としてあらわれているのが性的な話題である。性をオープンに語ることについて、月乃さんは次のように語る。「べてるの家」のＭさんが、「『セックス、セックス…』と明るく自分自身の『性』の話を語って」くれたことにより、「照れのない自然な感じに、会場全体がさわやかな共感の笑い声につつまれ」、「こういうふうに『性』を語ればいい」のだと「目からうろこが 10 枚くらい落ちたような気持ち」になった。「話しにくいことなのだが、人間を語る上で『性』の話題は避けて通れない」、「僕を理解してもらうために僕

自身の『性』について語りたいと思っていた」、「次回のイベントでは、10分間に30回くらいは『オナニー、オナニー…』ということにしよう」[月乃 2004:74-75]。

また、性的なことのみならず、「くだらない」ことを語るのは、「私はこういう人間なんだっていう確認」であると月乃さんは言う。

> 実はね、こんな私だったけど、昔どうだったかっていうと、結構ねプライドが高いところがあったんだよね。(中略)
> 妄想のプライドみたいのがあって、ひきこもって、何にもしないでオナニーばっかしてるんだけどさ、そのくせ頭じゃさ（中略）、私はやれば実はできる人間だとかさ、今はこうだけど社会に出ると頭はいいからできるとか、結構思ってたんだよね。（中略）
> それが逆に、短期間だけアルバイトしてたりしてたことがあったんだけど、そういうとこで結構駄目だから、そういうところで駄目だって言われると一発で傷ついちゃったりして。もう行きたくないみたいのが強かったんだよね。（中略）
> …で、私にとって今その、今日もくだらないこと言いますけど、いかに私が変だったかとか下ネタとかエロ男だったって話をしたがるんだけど、それは実は私にとって理由があって、私はこういう人間なんだっていう確認なんだよね。（中略）
> だから、昔はさ、私はこんなにすごいできるなんて思ってたけど、今は私の下のほうから私はこうだったっていうのを言うことによって余分なプライドを削りとってるんだわ。そうすると、そのままの私でいると、今まあ外の世界で傷つくこと結構あるんですけど、だけど昔の妄想のプライドで傷ついたときと比べると、ありのままの私って結構強いんだよね［高橋ほか 2003：73-74］。

> 自分のことね、まあ一種恥ずかしい話をするんだけど、話せるようになったの実は最近のことなんだよね。それまではどちらかというと、隠したいっていうか、自分の過去は隠していい面ばかり出すっていうか、まあある種ふつうの考えですけど、だけど最近逆にね、生きるのパッと楽になって今充実しているのは、逆に恥ずかしいこととかマイナスのことを思い切って言っているからで、それが結構生きる喜びなんだな［高橋ほか 2003：52］。

> 最近実は頭脳構造が変わってきて、自分の恥ずかしいところを出せば出すほど気持ちよくなるっていうね、露出狂的な男になってる［高橋ほか 2003：119］。

「プライドを削り」とり、「恥ずかしいこと」や「マイナスのこと」をも、思いきって話すことが、そのままの自分を肯定的に受け入れることに繋がっていると言える。

Ⅵ　生存者による肯定の技法

以上、表現者たちによる肯定の技法を記してきた。これらは、表現者たちの主観的な表現や作品群を精査しつつ、分析者側の視点から暫定的に7つに分類・類型化したものである。それらは、あくまでも暫定的な類型であり、それぞれが分かちがたく結びつきあっている。

日常生活を送りながら、「弱さ」や「生きづらさ」で繋がり、ネットワークを開

き［浮ヶ谷 2009；浦河べてる 2005；金子 1992］、さらに、プライドを削りながら日々の経験を笑いとばすかたちでさらけ出し、生存の糧とする。表現者の事例という特殊性を除けば、こうした肯定にいたる経験は、慢性病に見られる経験、寛解者社会［Frank 1995=2002］、障害・病いと「ふつう」とのはざま［田垣 2006］、という状況（「生きづらさ」もその状況の1つ）におかれた人々における経験についての議論と重なり合う。

例えば精神疾患が偏見に曝されることが日常的であるように、あるいは、アルコール依存症イコール意志の弱い人であるといったクリーシェにあらわれているように、「病気」をめぐる様々な偏見は厳然として存在する。そうしたなか、ここで示されたのは、それを打破しようという強い抗いというよりは、笑いや表現によって「ダメな人間」でありつつも生きていること、「何となく幸せ」と感じていることを表現しようとする社会的な運動でもある。プライドや他人のまなざしに縛られない境地は、支配的なストーリーから脱却し、たとえば「降りていく生き方」［横川 2003］のような代替的（オルタナティブ）なストーリーに書き換えていく作業［野口 2009］ともいえる。心的外傷後の生存者を扱った研究によると、苦悩の経験が「大海中の一滴」であることに気づくことが回復の大きなステップとなるという［Herman 1992=1996］。表現者たちにとって、日常生活のなかの苦悩の経験は、笑ってしまえる小さなものとして表現される。もちろん、そうした苦悩・生きづらさは、笑い飛ばせるような小さいものというわけではないが、日々職業生活も含めた暮らしを継続しながら、苦悩・生きづらさを、生活のなかで問い直すことによって、そのように表現されると言えよう。

Ⅶ　おわりに：課題として

「病気」の表現活動を行う表現者は、病気や障害による過酷な経験を有する生存者である。表現者たちは、「生きづらさ」や「弱さ」でつながりネットワークを開いている。日々生活を送りながら、それぞれが抱える「病気」や「生きづらさ」を、恥ずかしい話も含めて笑いを加味しつつ表現する。「余分なプライド」を削り、道徳的判断や期待される役割に必ずしも縛られない肯定の技法を示していた。

なお、言うまでもないが、本稿の事例だけであらゆる生存者の技法をすべて網羅的に提示できているわけではない。肯定の技法は文脈における個別性が高いことは改めて確認しておきたい。

以下、本稿の限界と課題について述べることで結びとしたい。

（a）「生きづらさ」でつながる人間関係・ネットワークに関して、本稿のイベントを中心とした記述は極めて限定的である。表現者のみならず、ゲストや、各メンバーが関係する組織間の関係、観客との関係、さらには活動の運営面の記述等もまた求められる。

（b）自己の恥ずかしい経験を笑いとばし、さらにそれらを表現できる人々は、そう多くはないであろうという点がある。疾病や障害、生きづらさを抱えている人々は様々あろうが、自己の恥ずかしい経験を肯定することにすら思いが至らない人々が圧倒的に多いであろうことは想像に難くないことであるし、たとえ生きづらさの諸要因を「個性」として肯定しえたとしても、本稿の事例のようなかたちで「表現」可能な人々は（こわれ者の祭典の表現者たちをことさらに特別視するものではないことを確認した上で言うが）、ごく一握りであろう。（匿名のブロ

グなどの媒体での表現とは異なる）オーディエンスを前にした表現（生きづらさ自慢や、性の話題のさらけ出し）は、生きづらさを抱える多くの人々にとっては、ルビコン川を渡るような行為であろう。生きづらさを抱えるマジョリティを念頭においた位置づけという課題が残るということである。

（c）さらに、分析者側として無条件に肯定を称揚することの危険性に常に留意する必要もあろう。たとえば、肯定を是とすることは、肯定という規範を示しうることになり、肯定できない人を批判する言説を生みかねないことはすでに多くの論者が指摘している［eg. 田垣 2006］。肯定が、多様性に満ちた、生きづらさを持つ人々の生活にとって普遍的な方向性である保証はない。

生存者の実践が健常者社会に対してどのようなインパクトを与えるか、逆に社会がどのようにそれらを受容するのかといった相互作用も含め、広く生存者の実践をとらえていく試みが要請されるはずであり、そのための端緒として本稿を位置づけたいと考えている。

謝辞

月乃氏、Kacco 氏をはじめ、調査にご協力頂いた「こわれ者の祭典」のメンバーおよび関係者の皆様に、心から謝意を表したい。

また、匿名査読者からは有益なコメントを頂いた上に、文献についての教示も賜った。記して感謝申し上げる。

註

1) 「サバイバー」の訳は、訳語として統一するなら「生存者」であろうという見解［中井 1996：387］に基づき「生存者」としている。

2) 表現者はそれぞれ表現活動で用いている本名とは異なるステージネームを用いており、本稿において表現者個人を示す際は、そのステージネームを用いている。月乃光司という氏名も本名とは異なる。

3) 新潟公演におけるゲストが病気などの当事者や精神科医師などであるのに対し、東京公演では著名なゲストが呼ばれることが多い。

4) 観客は、当事者であると同時に支援者である人など当事者、支援者といった区別は明確にはできないところもある。

5) 強迫行為は、『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引』によると次のように定義される［American Psychiatric Association 2000=2003］。(1) 反復行動（例：手を洗う、順番に並べる、確認する）、または心の中の行為（例：祈る、数を数える、声を出さずに言葉を繰り返す）があり、それらは強迫観念に反応して、もしくは厳密に適用しなくてはならない規則に従って行うよう駆り立てられている感じがする。(2) その行動や心の中の行為は、苦痛を防ぐ、もしくは減らす、または何か恐ろしい出来事や状況を避けることを目的としている。しかし、この行動や心の中の行為は、消去や防御をねらったものとしては、現実的な手段として筋が通っていない、もしくは明らかに過剰である。

6) 摂食障害は、中枢性摂食異常症ともいわれ、「心理的な要因で食行動の異常を呈する疾患で、神経性食欲不振症と神経性大食症が代表的である。」（難病情報センター）難病情報センター「難病情報センター｜中枢性摂食異常症　診断・治療指針」（http://www.nanbyou.or.jp/sikkan/072_i.htm 2010.4.15 閲覧）

7) 筆者らが参加した東京公演後の居酒屋での交流会では、参加者（観客）たちが自己紹介するごとに歓声が上がるなどの盛り上がりを見せていた。初対面であってもすぐにうち解けるような、なごやかで明るい雰囲気のなか、交流会参加者たちは、おもいおもいの相手と談笑を重ねていた。初対面の筆者（伊藤）に対してでさえ、例えば左腕の袖をめくって傷跡を見せながら生きづらかった過去を語ってくれる、そうした雰囲気には、参加者（観客）たちにとっ

てここそが生きづらさや痛みを分かち合える場であるという安心感と開放感があるように見受けられた。

8) 「脳性麻痺とは、受胎から生後4週間までに生じた脳の障害（非進行性病変）にもとづく、永続的なしかし変化しうる運動および姿勢の異常のこと」である［厚生省脳性麻痺研究斑会議 1968］。

9) 本稿で引用している作品は、一部を引用しているのみであること、作品そのものの価値とは別物であることを記しておく。また、作品は作者の経験に基づいて作られている要素が強いと思われるが、自己の経験のみではなく多くの生きづらさをもつ人々の経験をとりまとめて表現されていることが推察される。

参照文献

AMERICAN PSYCHIATRIC ASSOCIATION

2000 *DSM-IV-TR,* American Psychiatric Publishing.（『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引』医学書院、2003年。）

ANTNOVSKY, A.

1987 *Unraveling the Mystery of Health : How People Manage Stress and Stay Well.* Jossey-Bass Publishers（山崎喜比古・吉井清子監訳『健康の謎を解く――ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂高文社、2001年。）

BARNS, C., G. MERCER, and T. SHAKESPEARE

1999 *Exploring Disability : A Sociological Introduction,* Polity Press.（杉野昭博ほか訳『ディスアビリティ・スタディーズ――イギリス障害学概論』明石書店、2004年。）

CONQUERGOOD, D.

1995 Of Caravans and Carnivals: Performance Studies in Motion. *The Drama Review* 39 (4) : 137-141.

EVANS, K. and J. M. SULLIVAN

1995 *Treating Addicted Survivors of Trauma.* Guilford Press.（斎藤学監訳『虐待サバイバーとアディクション』金剛出版、2007年。）

FRANK, A. W.

1995 *The Wounded Storyteller : Body, Illness, and Ethics,* The University of Chicago Press.（鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手――身体・病い・倫理』ゆみる出版、2002年。）

服部　正

2003 『アウトサイダー・アート――現代美術が忘れた「芸術」』光文社。

HERMAN, J. L.

1992 *Trauma and Recovery.* HarperCollins Publishers.（中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1996年。）

稲沢　公一

2006 「物語としての精神障害――本人の語りを中心に」『障害・病いと「ふつう」のはざまで――軽度障害者　どっちつかずのジレンマを語る』田垣正晋編著、pp. 98-125、明石書店。

金子　郁容

1992 『ボランティア――もうひとつの情報社会』岩波書店。

KATZ, A. H.

1993 *Self Help in America : A Social Movement Perspective.* Twayne Publishers.（久保紘章訳『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社、1997年。）

木村　晴美・市田　泰弘

1996 「ろう文化宣言――言語的少数者としてのろう者」『現代思想』24 (5) : 40-45.

KLEINMAN, A.

1988 *The Illness Narratives : Suffering, Healing and the Human Condition,* Basic Books.（江口重幸・上野豪志・五木田紳訳『病いの語り――慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、1996年。）

近藤　英俊

2004 「現代医療の民族誌――その可能性」近藤英俊、浮ヶ谷幸代編『現代医療の民族誌』明石書店、pp. 11-46。

近藤　まゆみ・峰岸　秀子編

2006 『がんサバイバーシップ―がんとともに生きる人々への看護ケア』医歯薬出版。

LEVY, L.
1976 Self-Help Groups : Types and Psychological Processes. *Journal of Behavioral. Science* 11 : 310-322.
LIFTON, R. J.
1968 *Death in Life : Survivors of Hiroshima,* Weidenfeld & Nicolson.（桝井迪夫・湯浅信之ほか訳『ヒロシマを生き抜く—精神史的考察』岩波書店、2009年。）
中井　久夫
1996 「訳語ノート」HERMAN,J.,L. 1992 Trauma and Recovery. HarperCollins Publishers.（中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1996年、pp387-389。）
野口　裕二
2009 『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房。
ROACH, J.
1995 Culture and Performance in the Circum-Atlantic World. In PARKER,A. and SEDWICK,E.,(eds), *Performativity and Performance,* Routledge, pp.45-63.
田垣　正晋
2006 『障害・病いと「ふつう」のはざまで——軽度障害者　どっちつかずのジレンマを語る』明石書店。
高橋　和枝・月乃　光司・田原　和隆・Kacco
2003 『ひきこもりただいま冬眠中』新潟日報事業社。
月乃　光司
2004 『家の中のホームレス』新潟日報事業者。
2006 『詩集　仲間』1000番出版。
2009 『心晴れたり曇ったり』新潟日報事業社。
浮ヶ谷　幸代
2004 『病気だけど病気ではない——糖尿病とともに生きる生活世界』誠信書房。
2007 「病いと＜つながり＞の場」浮ヶ谷幸代、井口高志編『病いと＜つながり＞の場の民族誌』明石書店、pp.13-46。
2009 『ケアと共同性の人類学——北海道浦河赤十字病院精神科から地域へ』生活書院。
浦河べてるの家
2005 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院。
山本　須美子・加藤　尚子
2008 『ハンセン病療養所のエスノグラフィ』医療文化社。
横塚　晃一
2007 『母よ！殺すな』生活書院。
横川　和夫
2003 『降りていく生き方——「べてるの家」が歩む、もうひとつの道』太郎次郎社。

（2010年6月11日　掲載決定）